

第5回

DTM講座

～楽典的知識について④～

目次

1. 音の種類
2. スケール
3. 長調と短調
4. 特殊なスケール
5. コード
6. コードの種類
7. コード進行
8. 特殊なコード進行（そうでもない）
9. コード内で出している音
- ~~10. — 音の進む形~~
11. 転調
12. 最後に

8. 特殊なコード進行

前回、基本的なコードの流れについて説明しましたが、今回から少し特殊なコード進行を説明していきたいと思います（特殊というよりも形が決まっているもの）

まず前回紹介した知識で、出来ることですが

「V7」 → 「I」（ハ長調では「G7→C」の進行）

この動きは、ドミナント・モーションと呼ばれる動きで緊張感を持たせる（つまり不安定）な「V」から安定している「I」に進むことで落ち着かせるという意味があります。曲の終わりなどは基本的に、この動きで終わらせるとキチツとした感じになります。

なぜ安定するのかというと、「ハ長調」の場合の話ですが

「G7」には「シ」と「ファ」がありますね。

この二つの音はそれぞれ「ド」と「ミ」に行きたがるのです。

そう、つまり「C」の構成音の内の2つに行くのです。

なので、この動きは安定するというわけです。

次に

「II m7」 → 「V7」（ハ長調では「Dm7 → G7」の進行）

これは2-5・モーション（トゥーファイブ・モーション）

と呼ばれる進行で、曲を作るうえで使うことになるであろう

進行の一つです。

なぜこのような進行が出来るのかというと

先ほど紹介した「V7」というコードの構成音は

「ハ長調」の場合「ソ、シ、レ、ファ」ですね。

そして「ハ長調」での「II m7」の構成音は

「レ、ファ、ラ、ド」となっています。

そしてこの時「II m7」の音のうち3つが「V9」のコードと

同じになる（「G9」の場合「ソ、シ、レ、ファ、ラ」）ので

「V7」をこの二つに分解してもいいことになっています。

これは重要なコード進行なので覚えておいてください。

次の進行は少し考えないといけないのですが

「サブドミナント・マイナー」というものです。

どういうことかというところ、「ハ長調」で考えると

ハ長調の「サブドミナント・コード」つまり「IV」は

「F」ですね。

この後に「ハ短調」の「サブドミナント・コード」を使う

のが、この進行です。

「ハ短調」の「IV」は「Fm」なので、この場合の進行は

「F」→「Fm」となります。

ちなみに「C→F→Fm→C」という進行はよく使われる

進行のようです。

この時、構成音を見ると「F」の「ラ」が「Fm」で「ラb」

になり「C」の構成音でさらにその半音下がった「ソ」が

あります。このような**順番に半音ずつ下がる動きを**

「カウンターライン」と呼びます。

これもいい効果をもたらしやすいので覚えておくといいで

しょう。

最後に（意外と思いつかない・・・）

「クリシェ」という進行（進行？）を説明します。

この進行は

「同じコードネームで構成音を半音動かす」という動きで、とても簡単にイントロを作りやすいものなので覚えておいて損はありません（私はあまり使わないので知りません）。

この説明だけみるとさっきの「カウンターライン」と何が違うのかと思うかもしれませんが「カウンターライン」は

「違うコードで半音の変化がある」もので、「クリシェ」は「同じコードネームで半音の変化がある」ということです。

「クリシェ」の例として、「C→Caug→C6→Caug→C」

という進行があるとします。すると

「C」の構成音である「ソ」が「Caug」では「ソ#」に、

「Caug」での「ソ#」が「C6」で「ラ」になり、

また戻っていく、という動きが出来ていますね。

これが「クリシェ」という動きになります。

では、次に「コード内で出している音」にいきましょう

9. コード内で出していい音

コード内で出していい音というのは大体決まっています。(もちろん例外もあります。)

それは、

- ・その「調」で弾いていい音
- ・コードの構成音

というだけです。(少ないよ)

もちろんこの二つさえ満たしていれば自由に弾いていいというわけではありません。

まず「ハ長調」で「C」のコード上でメロディーを弾くようにしましょう。

そうすると「C」の構成音の「ド、ミ、ソ」はもちろん弾いていいです。その他の「ハ長調」の構成音である

「レ、ファ、ラ、シ」も弾いていいです。

ただし、この「C」の構成音以外の音を続けて使ったり長く鳴らしたり、小節内で「C」の構成音より比率が多かったりするのあまりよろしくありません。

なぜかというと、

「C」のコードらしさというのがなくなってしまうからです。

例えばあるメロディーで

「ド、ファ、レ、ファ、ド」とあったら、「C」の構成音が

「ド」しかなく、その上「5つのうち2つ」しかありません。

(まあそこらへんは音の長さによりますが・・・)

また「ファ、レ、ファ」となっていてこれも気持ち悪いです。

(実際鳴らすと分かるよ！！)これではむしろ「Dm」です。

なので「C」の構成音以外を使うときは

- ・ 続けて使わない
- ・ あまり長い音にしない
- ・ 多く使わない

ことにしてください。つまり

「ド、ソ、ファ、ミ、レ、ミ、ド」みたいな感じです。

また「C」らしさを出すために基本的に「C」の根音と

第5音(根音から数えて5つめの音「ド、レ、ミ、ファ、(ソ)」)

を使ってください。

これらに注意すればそのコードらしさが出ると思います。

~~10.~~ 音の進む形

そんなものなかったんや・・・

もうね、自分の適当な先読みが恥ずかしいです。

音の進む形って本当のガチガチの理の話になるしね、
それになんか「ドミナント・モーション」の所でも基本的に
知っておけばいい動き出てるからね、これ以上は・・・。

まぁ・・・つまりあれです。ここらへんの事は私もそこまで
深く解説できないんですよ、というか一つの音には色々な
要素を含んでいるんですが、そのことや、倍音の関係とかね
解説するとこっちもガチで終わっちゃうんで無理です。

なので、この「10.」については無かったことにさせてい
ただきます。

「だれか慧音先生呼んできてー」

11. 転調

次は転調について解説していきます。

転調というのは文字通り曲の中で「調」を変える事です。

「調」を変えるのは好きに突然やっていいものではないです。

(まあやってもいいのですが、すごい変化になります。)

まず転調をするには「調」のつながりを知る必要があります。

調にはつながりのある「調」が存在します。それが

- ・ 属調
- ・ 下屬調
- ・ 平行調
- ・ 同主調

の4つで、これらを「近親調」と呼びます。

まず**属調は、転調するまえの調の根音から数えて5つ目の音が根音になる調のこと**をいいます。

(ハ長調なら「ド、レ、ミ、ファ、ソ」で「ソ」が根音のト長調)

下屬調はその逆で5つ下の音が根音の調です。

(ハ長調なら「ファ、ソ、ラ、シ、ド」で「ファ」のヘ長調)

平行調は「#」や「b」のつく数が同じになる調のことです。

(この時の短調は「自然短音階」で考える。)

つまり「ハ長調」は「#」も「b」もつかないので
短調で同じ条件を満たす調は「イ短調」になります。

最後に同主調は一度出てきましたが、これは
根音と同じ音になる調のことです。

つまり「ハ長調」なら「ハ短調」のことです。

この4つに動く変化させることによって、なめらかに転調させることが可能になります。

そして実際に変化させるのに必要な動きに

「セカンダリドミナント」

というのがあります。

これは、前に話した「V7→I」という進行がありましたね。

これは非常に安定し流れなのですが、これを他のコードで考えるというものです。

例えば「ハ長調」で、「I」である「C」を使って

「C→C7」という進行を考えます。

この時、この「C7」というのを他の調でいう「V7」に見立ててください。すると、「C7」が「V7」となる調は、

「F、Gm、Am、B♭、C、Dm、Em♭5」

I II III IV V VI VII

となる「ヘ長調」であることが分かります。

するとこの「C7」の次に「F」に進行すればいいわけです。

これで、ここから先は「ヘ長調」になり「シ」に♭がついていくわけです。(ちょっと説明が変かなあ・・・)

そして「ヘ長調」はさっき紹介した「近親調」の中の

「下屬調」であることが分かりますね。

これで綺麗な転調が出来ました。もちろん他の動きもあるので、頑張って探してみてください(といっても少ないけどね)

これで転調の話が終わります。

12. 最後に

いや～やっと山場が終わりました。

これを読んだみなさんもお疲れ様です。(そして私も)

この音楽的知識を覚えれば曲をつくる時、楽に考えれるようになると思います。

ですが、知識ばかりに捕らわれてもいけないという事も覚えておいてください。

(音楽では常識に捕らわれてはいけないのですね！！。)

また、この音楽の理論が全く通じない音楽も世の中たくさん存在します。(特にジャズとかブルース系・・・)

まあこれで知識はもう十分ついたと思います。

これからドゥンドゥン曲を作っていこうぜ！！

次からは「楽器の知識」になりますので、ここみたいなガチガチではないと思うので気楽にいきましょう。

by 巫女好きの人